

第2章 授業で勝負する

第4節 授業記録を読む（補足）

この節は、以下の4項で構成しています。

■授業記録を読む「総合」■

■授業記録を読む「文学」■

■授業記録を読む「説明文」■

■明日の授業を作る■

- ◎「学びの共同体」を作る
- ◎【補説】「学びの共同体」をめざして
- ◎説明文と文学の授業を作る

今回、■明日の授業を作る■の補足として、次の一文を追加します。

- ◎「学びの共同体」と「授業のUD化」で子どもたちの学びをつくる

■明日の授業を作る■

「学びの共同体」と「授業のUD化」で
子どもたちの学びをつくる

「学びの共同体」と「授業のUD化」で 子どもたちの学びをつくる

草尾 佳秀

第3学年 国語科学習指導案

- 1 単元名 はたらく犬について調べよう
教材名 「もうどう犬の訓練」（東京書籍 小学校3年下）

2 目標

- だいたいの言葉や文を見つけながら読み取る。【読むこと】
○ 書かれている内容を短くまとめながら読み取る。【読むこと】

単元の評価規準

関心・意欲・態度	書くこと	読むこと	言語活動
○ 働く動物について関心を持って読み、進んでいろいろな資料を読んで調べようとしている。	○ 知りたい事柄について、資料を読んで調べ、カードに書く事柄を考えている。〈B(1)ア〉 ○ 調べて分かったことを整理し、短い文章にまとめて書いている。〈B(2)ウ〉	○ 目的に応じて、段落ごとにだいたいの言葉や文を見つけながら読んでいる。〈C(1)イ〉 ○ だいたいの言葉や文を押さえ、書かれている内容を短くまとめながら読んでいる。〈C(1)エ〉	○ 文章を読んでもっと詳しく知りたいと思ったことを知るために、内容が関連する他の本を探して読んでいる。〈C(2)イ〉

3 指導について

- 本教材では、知りたいことについて調べて短くまとめる活動を通して、だいたいの言葉や文を見つけながら読み、短くまとめて要約する力をつけることをねらいとしている。
- この時期の児童は、生活範囲の広がりとともに、地域の方々との交流や校外での活動で、見聞を広げる機会が増える。そうした中で、身の回りや地域社会の出来事への関心も高まっている。説明文を読んで、身近なペットとしてかわいがられている犬と盲導犬の違いに驚き、盲導犬をはじめとする働く犬についても「もっと知りたい」という思いをより強く抱くことであろう。そのため、本や資料などのたくさんの文章の中から、知りたいことを意欲的に探することが期待される。知りたいことを調べるために適切な本や資料を選んだり、どこに知りたい情報が掲載されているかを探ったりする力をつけることもめざしたい。
- 1学期の説明文教材「自然のかくし絵」や、補助教材として用いた「ありの行列」において、子どもたちは説明文の三段構成と要点のまとめ方について学んだ。また、

文学教材「ゆうすげ村の小さな旅館」では、あらすじのまとめ方を学習した。

これら一連の学習を重ねる中で、「要約」する力を着実に身につけてきている子がいる一方、読むこと自体に抵抗のある子も存在する。少人数学級の中で両極端な姿を示す子どもたちを、学習集団として組織し、すべての子の学びを成立させることが重い課題になっている。

- 本単元は、「読解」の学習と、そこでの学びを使った「活用」の学習で構成されている。前半の「読解」においては、児童の実態を踏まえ、「授業のユニバーサルデザイン化」と「協同的な学び」という2つのアプローチを併用して授業改善を図りたい。

「授業のユニバーサルデザイン化」（筑波大学附属小学校・桂聖さん提唱）というのは、特別支援教育の考え方を生かして、全員が楽しく「わかる・できる」授業づくりをすすめようというものである。授業づくりの「工夫」という国語教育からのアプローチと、個別の「配慮」という特別支援教育からのアプローチで、授業づくりの工夫をした上で個別の配慮をするという順序で授業をデザインしていくことになる。

授業では「論理」を目標にする。具体的に言うと、「論理的な話し方・聞き方」「論理的な書き方」「論理的な読み方」を教えるということである。

論理を授業の目標にした上で、「焦点化」「視覚化」「共有化」という3つの要件で授業をデザインする。「授業を焦点化(シンプルに)する」とは、ねらいや活動を絞ることである。「授業を視覚化(ビジュアルに)する」とは、視覚的な理解を重視した授業にすることである。「授業を共有化(シェア)する」とは、話し合い活動を組織することである。具体的には授業展開の中で触れていくことにする。

「学びの共同体の学校改革」（学習院大学・佐藤学さん提唱）においては、小学校低学年においては全体学習とペア学習による協同的な学び、小学校3年以上、中学校、高校においては男女混合4人グループによる協同的学びを中心に授業を組織している。

そして、学びの共同体の学校改革が協同的学びを中心に授業を組織している理由として、次の4点を挙げている。

- ① 協同的学びは、学びの本質である。
- ② 一人残らず子どもの学びの権利を実現するためには、協同的学びによって子ども同士が学び合うより他に方法はない。4人以下の小グループの学び合いは、どの形態の授業よりも強制的に学びを促す機能がある。
- ③ 小グループの協同的学びが、学力の低い子どもの学力を回復する機能を発揮することである。
- ④ 協同的学びが、学力の高い子どもにも、より高い学力を保証することである。ただし、〈ジャンプの課題〉への挑戦を含んでいることが条件である。

通常、学びの共同体の学校の協同的学びにおいては、誰もが理解すべき〈共有の課題〉(教科書レベル)と、その理解を基礎として挑戦する〈ジャンプの課題〉(教科書レベル以上)の2つの課題で授業をデザインしている。

〈共有の課題〉においては、個人作業の共同化ともいうべき、小グループの協同的

学びによって組織する。個人作業の共同化においては、分からない子どもが「ねえ、ここどうするの？」という問いを発することから学び合いが出発する。佐藤さんの観察では、この学びで最も利益を受けているのは学力の高い子どもだそうだ。

〈ジャンプの課題〉は、クラスの半分から3分の1が達成できるレベルが妥当だという。佐藤さんによれば、この学びで最も恩恵を受けるのは低学力の子どもであり、〈ジャンプの学び〉を組織することで低学力問題の解決に効果を上げた学校がいくつもあるそうだ。

協同的学びを導入するにあたって、「教え合う関係」と「学び合う関係」の違いを整理しておく必要がある。「教え合う関係」は、分かっている子どもが分かっている子どもに一方的に教える関係で、両者の間に互惠的关系はない。それに対して「学び合う関係」は、分からない子どもが「ねえ、ここどうするの？」と質問することから出発する学び合いであり、両者に恩恵をもたらす互惠的关系が成立している。協同的学びがめざしているのは、「学び合う関係」である。

いくつかの技術的問題について触れておきたい。

小グループは、男女混合の4人グループで組織する。5人のグループができる時は、3人グループを3つにするなどして対応する。男女混合の方が探求が活性化される。小グループの組織は、多様な個性や能力の子どもが偶発的に組織されるのが好ましく、クジで決め、適宜編成を変えるのがよい。

1つの授業において、〈共有の学び〉と〈ジャンプの学び〉の両方を組織する。小学校中学年においては、全体の協同的学びと小グループの協同的学びを適宜組み合わせて授業を進める。高学年以上では、〈共有の学び〉と〈ジャンプの学び〉を前半と後半に割り当てるのが基本型である。なお、小グループの活動の間、教師は声を掛けない。歩き回るのも子どもたちの学びの妨げになる。ただし、参加できていない子どもは援助し、学び合いが滞っているグループに対しては最小限の援助を行う。

クラス全体を対象とする授業は、コの字型(ゼミナール形式)の配置で行う。高学年以上では、最初から最後まで小グループの配置のままで、全体の協同的学びと小グループの協同的学びの両方を実施してもよい。

「協同的な学び」は、これまでの授業形態(子どもの側から言えば、学びのカタチ)を一変させた。そんな中で、OとHは何か学びの場に踏みとどまっているというのが実状である。「まねる」ことは「まなぶ」ことの第一歩だと確信し、丸写しも含めて授業参加を評価してきた。今回、次の一步が見られるかどうか勝負所である。

「協同的な学び」を教授法の側からのアプローチと位置づけているのに対して、「授業のユニバーサルデザイン化」は、教育内容の側からのアプローチという位置づけになる。その融合と統一を模索した授業展開を追究するになる。つまり、1時間のねらいを「焦点化」した上で、ペア学習やグループ学習のカタチを中心に学習を進め、その中に「共有の課題」と「ジャンプの課題」を設定する(課題設定については未消化のまま迷っている)。課題には「しかけ」を作ることによって「視覚化」を図り、グループ学習による「共有化」をめざす。また、ペア学習やグループ学習で困難が予想される子には、個別支援を用意する。――以上のような授業デザインで、目標に近づく指導をしたい。

4 指導計画(全 11 時間)

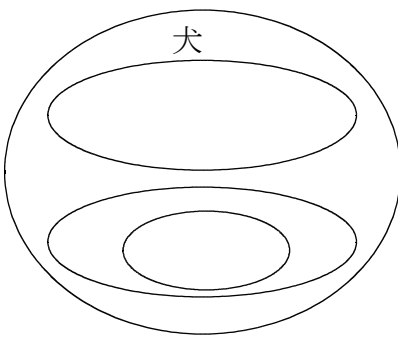
次	時	主な学習活動	評価基準	評価方法
一 学習の見通しを持つ。				
	1	○学習のねらいと活動の流れを確かめ、初発の感想を発表する。	○働く犬に関心を持ち、教材文の内容に興味を持って読もうとしている。【関心・意欲・態度】	発言 ノート
二 説明文の内容を読み取り、要約する。				
	2 本 時	○だいたい言葉や文を手がかりに、形式段落①～③・⑩を読み、はたらく犬の中の盲導犬について要約する。	○だいたい言葉や文を手がかりに、盲導犬について読み取っている。【読む】 ○だいたい言葉や文をみつけ、言葉を補ったり書き換えたりしながら、内容を短くまとめている。【読む】	ノート 発言
	3 本 時	○だいたい言葉や文を手がかりに、形式段落④～⑮を読み、盲導犬になるための訓練内容を読み取る。	○だいたい言葉や文を手がかりに、訓練の内容を読み取っている。【読む】	ノート 発言
	4 本 時	○だいたい言葉や文を手がかりに、形式段落④～⑮を読み、盲導犬になるための訓練内容について要約する。	○だいたい言葉や文をみつけ、言葉を補ったり書き換えたりしながら、内容を短くまとめている。【読む】	ノート 発言
	5 本 時	○だいたい言葉や文を手がかりに、形式段落⑬～⑮を読み、盲導犬にふさわしい心構えを身につける訓練について要約する。	○だいたい言葉や文を手がかりに、盲導犬にふさわしい心構えについて読み取っている。【読む】 ○だいたい言葉や文をみつけ、言葉を補ったり書き換えたりしながら、内容を短くまとめている。【読む】	ノート 発言
三 もっと知りたいことを本や資料を使って調、「はたらく犬 もの知りカード」を作る。				
	6	○「はたらく犬 もの知りカード」を作るために調べることを決める。	○働く犬について調べることに関心を持ち、知りたいことを進んで考えようとしている。【関心・意欲・態度】	行動観察 発言
	7 8	○いろいろな本や資料から働く犬について知りたい事柄を調べる。	○知りたい事柄について調べるために、関連する内容の本や目的に合った本を活用して読んでいる。【読む】 ○知りたい事柄を調べるために、だいたい言葉や文を見つけながら読んでいる。【読む】	ノート 行動観察
	9	○調べて分かったことを短くまとめて「はたらく犬 もの知りカード」	○調べて分かったことを整理して、だいたい言葉や文を落とさないように、短くまとめて書いている。【書く】	カード 行動観察
	10	○「はたらく犬 もの知りカード」を友達と交換して読み合い、感想を交流する。	○「はたらく犬 もの知りカード」を友だちと交換し、問いの答えになるように、だいたい言葉を押さえて分かりやすく要約できているか確かめ合っている。【書く】	行動観察 発言
四 学習を振り返る。				
	11	○「はたらく犬 もの知り事典」を作り、学習したことを振り返る	○だいたい言葉や文を見つけながら読む力と要約する力について学習したことを振り返	行動観察 発言

			り、今後の学習活動に生かそうとしている。 【関心・意欲・態度】	
--	--	--	------------------------------------	--

5-1 本時案（第2時） 2013年10月22日（火） 第3校時

(1) 目標 だいたい言葉や文を手がかりに、盲導犬とはどういう犬かを読み取り、要約することができる。

(2) 展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
<p>1 前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>もうどう犬とはどういう犬かを短くまとめよう</p> </div>	<p style="text-align: right;">→焦点化</p>	
<p>2 「要約」のわざを知る。</p>	<p>○ P41「言葉の力」を読み、「要約のわざ」としてまとめる。</p> <p>「要約のわざ」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 だいたい言葉や文を見つける 2 内容を短くまとめる <ol style="list-style-type: none"> ①だいたい言葉や文を使う ②分かりやすく書きかえたり ③言葉をおぎなったりする 	
<p>3 盲導犬の概要をつかむ。</p> <p style="text-align: center;">【共有の課題】</p> <p>○「犬はどんな動物か」</p> <p>○犬の関係図を仕上げる</p> <div style="text-align: center;">  </div>	<p>○「問い」に対する「答え」の部分に線を引かせる。</p> <p>【支援】「犬は、……動物です。」の文で、答えの見つけ方を助言する。</p> <p>○「答え」の部分に線を引き、関係図に書き込ませる。</p> <p style="text-align: right;">→視覚化</p> <p>○ペアで話し合いながら確認を行う。</p> <p style="text-align: right;">〈ペア学習〉</p> <div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; align-items: center;"> 上 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin: 5px;"> ペットとして… </div> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-top: 20px;"> 下 <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin: 5px;"> 働く犬 </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin: 5px;"> 盲導犬 </div> </div> </div> </div>	
<p>4 「盲導犬とはどんな犬か」</p>	<p>○「問い」に対する「答え」を見つけてノート</p>	<p>・ だいたい言葉や文を</p>

<p>「目の不自由な人にとって盲導犬とは何か」を短くまとめる。</p> <p>【ジャンプの課題】</p> <p>5 本時学習のまとめをする。</p>	<p>にまとめさせる。</p> <p>【まとめる手順】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「問い」に対する「答え」の段落を見つけ、該当部分に線を引く。 ・「要約のわざ」を使ってまとめる。 <p>○基本的には子どもたちに任せる。学習が成立しにくいグループには、「問い」と「答え」の照応関係などヒントを与える。</p> <p>〈グループ学習〉 →共有化</p> <p>○全体交流</p> <p>○「要約」「要約のわざ」についておさえる。</p> <p>○「序論」と「結論」の要約を復唱し、次時以降「本論」の読みに入ることを予告する。</p>	<p>手がかりに、「盲導犬」について短くまとめている。</p> <p>(ノート・発言)</p>
---	--	---

5-2 本時案（第3時） 2013年10月23日（水） 第3校時

(1)目標 だいたい言葉や文を手がかりに、盲導犬になるための訓練の内容を読み取る。

(2)展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
<p>1 前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。</p> <div data-bbox="188 1234 1083 1330" style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> もうどう犬になるためにはどんな訓練をするのか読み取ろう </div> <p>2 「本論」部分(④～⑮段落)を読む。</p> <p>3 盲導犬の訓練の内容を読み取る。 (1)順序や時期を表す言葉に注意して、盲導犬の成長過程と訓練について整理する。</p> <p>【共有の課題】</p>	<p>→焦点化</p> <p>○ペア音読</p> <p>〈ペア学習〉</p> <p>○順序や時期を表す言葉「さいしょは」「次は」「さらに仕上げの一か月は」を見つけて、赤鉛筆で囲ませる。</p> <p>○だいたい言葉には赤でサイドラインを引かせる。</p> <p>→視覚化</p> <p>○グループで確認しながらワークシートを仕上げる。</p> <p>〈グループ学習〉 →共有化</p>	<p>・だいたい言葉や文を手がかりに、盲導犬になるための訓練内容を読み取っている。</p> <p>(ワークシート・発言)</p>

<p>(2) 訓練内容を犬の特長を生かしている部分と抑えている部分に分けて整理する。</p> <p style="text-align: center;">【共有の課題】</p> <p>(3) 「犬の特長を抑えた訓練」をするのはなぜか考える。</p> <p style="text-align: center;">【ジャンプの課題】</p> <p>4 本時学習のまとめをする。</p>	<div data-bbox="635 159 1152 786" data-label="Diagram"> </div> <p>○全体交流</p> <p>○「犬の特長を生かしている」段落番号を赤で、「犬の特長を抑えている」段落番号を青で囲ませる。</p> <p>【支援】「犬の特長」とは何かを振り返らせる。</p> <p>○(1)で作成した表に赤・青を重ねることで、訓練が犬の特長を生かしたり抑えたりしながら進められていることを理解させる。</p> <p style="text-align: right;">→視覚化</p> <p>○「犬の特長を抑えることが使う人の安全確保につながっている」等、自分なりの考えをまとめさせる。</p> <p style="text-align: right;">〈グループ学習〉 →共有化</p> <p>○全体交流</p>
--	--

5－3 本時案（第4時） 2013年10月24日(木) 第1校時

- (1) 目標 だいたい言葉や文を見つけながら、盲導犬になるためにどんな訓練をするのかを要約することができる。

(2)展開

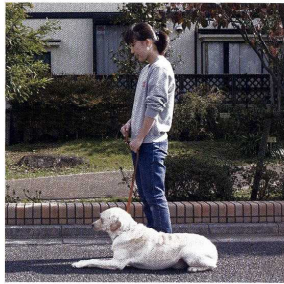
学習活動	教師の指導と支援	評価
<p>1 前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。</p> <p>もうどう犬になるためにはどんな訓練をするのかを短くまとめよう</p>	<p>→焦点化</p>	
<p>2 「本論」④～⑫段落を読む。</p>	<p>○役割音読</p> <p>1回目 「人間の言うことにしたがう訓練」と「人を安全にみちびく訓練」に分かれて</p> <p>2回目 「犬の特長を生かしている部分」と「抑えている部分」に分かれて</p> <p>〈ペア学習〉</p>	
<p>3 ④～⑫段落を要約するために必要な、だいたい言葉や文を確かめる。</p> <p>【共有の課題】</p>	<p>○前時に整理したワークシートや教科書を見ながらだいたい言葉、文を確かめる。</p>	
<p>4 盲導犬になるためには、どんな訓練をするのかを、短くまとめてノートに書く。</p> <p>【共有の課題】</p>	<p>○どんな訓練をするのかを書くため、「～する訓練をします。」という書き方になるように指示する。</p> <p>○文をつなぐ言葉、こそあど言葉などを使ったり、分かりやすく書き換えたり、言葉を付け足したりして、工夫することも伝える。</p> <p>〈グループ学習〉</p> <p>→共有化</p>	<p>・だいたい言葉や文を手がかりに、短くまとめている。</p> <p>(ノート・発言)</p>
<p>5 盲導犬ができなくてはいけなことはどんなことか考える。</p> <p>【ジャンプの課題】</p>	<p>○難度の高い設問なので、学習活動4でまとめた要約をさらに短くしたものでも可とする。</p> <p>〔参考例〕盲導犬は、<u>命令に従うか、従ってはいけなことを、使っている人の安全を考えて決めることができなくてはいけません。</u>また、道を歩くときも、人が安全に歩けるように導くことができなくてはなりません。</p> <p>〈グループ学習〉</p> <p>→共有化</p>	
<p>6 本時学習のまとめをする。</p>		

5-4 本時案（第5時） 2013年10月25日（金） 第2校時

(1) 目標 だいたい言葉や文を手がかりに、もうどう犬にふさわしい心構えを読み取り、要約することができる。

(2) 展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
1 前時の学習を振り返り、 本時のめあてを確認する。	→焦点化	
<div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>もうどう犬がしてはいけないことを短くまとめよう</p> </div>		
2 全文を音読して、「もう どう犬がしてはいけないこ と」が書かれている段落を 見つける。	○段落交代読みで全文音読 〈ペア学習〉 【支援】「～してはいけません」という表現 に着目させる。	
3 「もうどう犬がしてはい けないこと」をまとめる。 【共有の課題】 ○要約する ○「してはいけないこと」 ＝「盲導犬にふさわしい 心構え」であることを確 認する	○⑭段落を読んで、だいたい言葉や文を見つけ て短くまとめる。 〈グループ学習〉 →共有化 ○全体交流 ○「心構え」が犬の特長を抑えたものであり、 「盲導犬は犬としての本来の要求の多くを抑 えて無理をしてくれている」ことを話す。	・だいたい言葉や文を 見つけて、「してはい けないこと」につい て短くまとめてい る。」 (ノート・発言)
4 「してはいけないこと」 は、なぜいけないのか考え る。 【ジャンプの課題】	○盲導犬が「してはいけないこと」をしたとし たら、どんな不都合が起こるのか、具体的な 場面を設定してシナリオを書く。 ○グループでシナリオを選び、役割を決めて劇 化する。 →視覚化 〈グループ学習〉 →共有化	
5 本時学習のまとめをす る。		



- ① 犬は、かしこく、活発で、人間となかよくなれる動物です。
- ② ペットとしてかわいがられる犬もいます。また、けいさつ犬などのように、人間のためにはたらく犬もいます。はたらく犬は、動物としての特長を生かしたり、おさえたりして、訓練された犬なのです。
- ③ もうどう犬も、はたらく犬のなかまです。もうどう犬は、目の不自由な人が、町を安全に歩けるように、目の代わりになって助ける犬です。
- ④ もうどう犬になるための訓練は、犬が小さいになると始まります。
- ⑤ さいしょは、人間の言うことにしたがう訓練です。
- ⑥ 訓練をする人は、「カム」(来い)、「ダウン」(ふせろ)、「シット」(すわれ)などのように、英語で命令を出します。犬は、命令の言葉を少しずつおぼえ、そのとおりにできるようにしていきます。

10

5

助
ジ
タ
タ
ス
ケ
ル
代
グ
イ
カ
ル

もうどう犬の訓練

吉原 順平 文

知りたいことを見つけて、読みとったことを短くまとめる力を身につけよう。



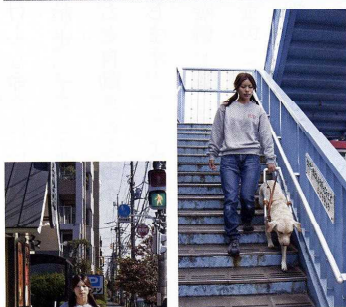
「もうどう犬の訓練」を読んで、だじな言葉や文を見つけ、書いてある内よを短くまとめる力を身につける。

はたらく犬について知りたいことを、身につけた力をかしていろいろな本やしりょうで調べよう。

調べて分かったことを短くまとめて「はたらく犬」もの知りカードを作り、みんなで見よう。

犬
ケ

犬
ケ



- がつたわってきます。
- ⑪ あぶないものの前で止まったり、それをよけて進んだりすることを、くりかえしくりかえし教えこまれます。たとえば、だんになっている所では、つまずいて転ばないように、かならず一度止まります。電柱があれば、つれていいる人がぶつからないように、上手によけるようにします。

5

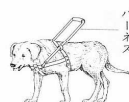
転
ク
ン
ガ
ル



- ⑦ いちばんむずかしいのは、「ウェイト」(待て)の命令です。もともと活発な動物である犬にとって、次の命令があるまで動かないでいるのは、つらいことなのです。
- ⑧ しかし、たとえば、駅で電車を待つときに、もうどう犬が勝手に動くと、目の不自由な人がここにあうかもしれません。ですから、もうどう犬は、がまん強くじっと待つことができればなりません。
- ⑨ 次は、人を安全にみちびく訓練です。
- ⑩ この訓練が始まると、「ハーネス」という器具が犬の体にとりつけられます。つれていいる人がハーネスをにぎると、犬の動き

10

5



待
グ
イ



⑫ 使っている人にとってきけんな命令には、したがないことも教えられます。たとえば、自動車が走ってくる所で、わざと「ゴー」(進め)と命令し、命令どおりに進むと自動車とぶつかりそうになるという訓練をします。このような訓練をくりかえして、あぶないときは、「ゴー」と言われても、前へ進まないことをおぼえるのです。

⑬ 訓練を通して、もうどう犬にふさわしい心がまえも身につけていきます。

⑭ もうどう犬は、たくさんの方がいそがしく動き回っている町で仕事をします。そこでは、いろんなことに会います。しかし、どんなことがあっても、おこったり、ほえたり、あばれたりはいけません。また、仕事中は、人にあまえたり、じゃれたり、おいしそうなにおいのする方に行こうとしたりしてはいけません。さらに、他の犬がほえても、気にしないこともひつようです。

族
ゾク



⑮ こうした訓練は、約三か月から半年かかります。さらに仕上げの一か月は、実さにももうどう犬を使う人といっしょに生活し、いっしょに町を歩く練習をします。

⑯ 訓練を終えて一人前になったもうどう犬は、八年から十年ぐらい、使う人にくらしてはたります。目の不自由な人にとって、もうどう犬は体の一部であり、心の通う家族なのです。

他
タ
※さらに

「もうどう犬の訓練」の授業を終えて

1 全体を通して

ここでは、「授業のユニバーサルデザイン化」と「学びの共同体」というテーマに即して、達成できたこととできなかったことを整理しておきたい。

まず、「学びの共同体」＝「協同的学び」について。

学びのカタチとしては、年度初めから4人と3人のグループ学習を一貫して続けてきた。そういう意味では、半年の時間的経過によって子どもたちはこのカタチに十分慣れている。学びの質という点では、例えば算数においては、「共有の課題」と「ジャンプの課題」がある程度機能している。しかし、国語においては未知の世界だ。

佐藤学さんは、「中学年においては、全体の協同的学びと小グループの協同的学びを適宜組み合わせる授業を進める。高学年以上では、〈共有の学び〉と〈ジャンプの学び〉を前半と後半に割り当てるのが基本型である」と述べておられる。したがって、3年生で「ジャンプの課題」にこだわることはないのだが、あえて挑戦してみた。結果的に、「ジャンプの課題」については失敗だった。少し詳しく分析しておきたい。

第2時と第3時は、課題設定において失敗だった。第2時は、序論部分の学習という流れの中でいきなり結論部分に解のある問いを出した。しかし、子どもたちはほとんど間髪を入れずに答えを見つけてしまった。子どものチカラを読み誤ったことが原因で、ジャンプの課題たり得なかった。第3時も同様の理由で、ジャンプの課題にはならなかった。

第4時と第5時は、時間設定において失敗だった。課題の質としては「ジャンプの課題」たり得たのだが、それに取り組む十分な時間を確保できなかった。時間不足は4時間とも同様で、これには2つの原因が考えられる。1つは授業者の不慣れであり、1つは子どもの学ぶチカラと指導案のギャップである。

次に、「授業のユニバーサルデザイン化」について。

UD化の柱「焦点化」については、授業後に行った振り返りの会で先生たちから高い評価をいただいた。授業の組み立ては概ね狙い通りにできたと言える。

2つ目の柱「視覚化」については、計画段階での不十分さを感じている。「ジャンプの課題」を配置したいという問題意識から、「共有の課題」に取り組む時間を短縮したいと考えた。その結果、座学に偏った授業展開になってしまった。授業を終えて思うに、座学偏重が「共有の課題」を解決するまでの時間を長引かせてしまったという側面があったかもしれない。精査を要する。

3つ目の柱「共有化」＝「話し合い活動の組織化」については、子どもたちが着実に力をつけ、学習集団として育ってきている。この部分は、「協同的な学び」の課題と深く重なり合っている。

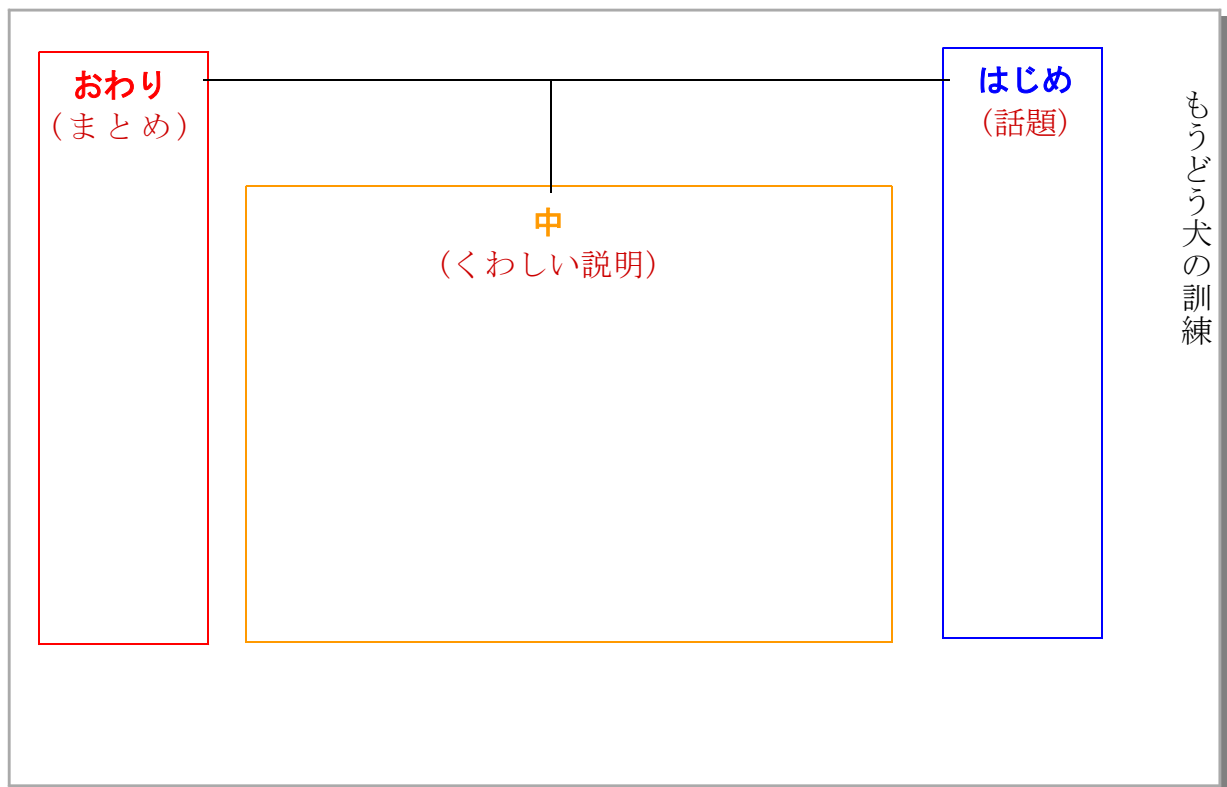
「指導の工夫」と「個別の配慮」という視点から検証した時、「個別の配慮」の不十分さが際立っている。指導案でターゲット児童として挙げたOとHのうち、Oは想定以上の

活躍が見られた。Hは、漢字の読字力・書字力、言葉の意味理解力に課題があり、教科書にルビを付ける程度の対応では学習に参加できない状況にある。確かにその子なりの頑張りというものはあるのだけれど、それは「わかる・できる」レベルからはほど遠い。教師の無為を棚上げにすることはできないが、果たして集団での学習が成立するののかという根本的な問題に直面している。

2 各時間を振り返って

(1) 第2時(10月22日)の授業について

第1時の授業が終わった10月21日の放課後、教室の後ろに説明文の3段構成図を書いた模造紙を貼りだした。



第2時の授業の冒頭、この文章は「はじめ(問い)」と「おわり(答え)」という説明文ではなく、「はじめ」に話題が提示され「おわり」にまとめがあり、「中」で詳しい説明をするという構造になっていることを話した。

本時のねらいは、「要約のしかたを知る」ことである。焦点化はねらいを絞り込むことであり、授業展開はこのねらいに集約されるように構成する。

まず、「要約」の意味とわざについて説明し、A2サイズにまとめた「要約のわざ」(内容は指導案参照)を掲示した。そして、「実際にこのわざを使って要約をしてみましょう」と言って、「犬はどんな動物ですか」という問いを出した。「問い」に対する「答え」部分に傍線を引かせた。冒頭の1文が答えということもあって、全員が正解していた。そこで、答えではなく「答えの見つけ方」を発表させた。「犬はどんな動物ですか」「犬は〇〇な動物です」という照応関係を言葉に出して確認させるステップは、本時では大事な共有化の

作業だ。

続いて、楕円だけのワークシートを配って、「円の中に合う言葉を入れてごらん」とだけ言った。「盲導犬」という言葉をどこかに入れると言うかどうかギリギリまで迷ったが、指導案通りノーヒントにした。「働く犬」の中の円が「警察犬」か「盲導犬」かで意見が分かれ、結果的に子どもたちの読みが深まった。課題をドンと与えて、じっと待つ…「学びの共同体」を意識するようになってからの授業の醍醐味の片鱗が見られた場面だ。

2つ目の「問い」は「盲導犬はどんな犬ですか」だ。「答え」の文に傍線を引かせ、キーワードを使ってまとめさせる手順は変わらない。短くまとめるやり方は複数出された。ここは、「盲導犬は、…犬です。」という文型で「目の不自由な人」「助ける犬」というキーワードが入っていれば正解とした。

3つ目の問いとして、「目の不自由な人にとって盲導犬とは何ですか」と聞いた。子どもたちが開いている教科書の4ページ先の問いなのだが、間髪を入れずに答えられてしまった。「ジャンプの課題」にならなかったことはすでに述べた。

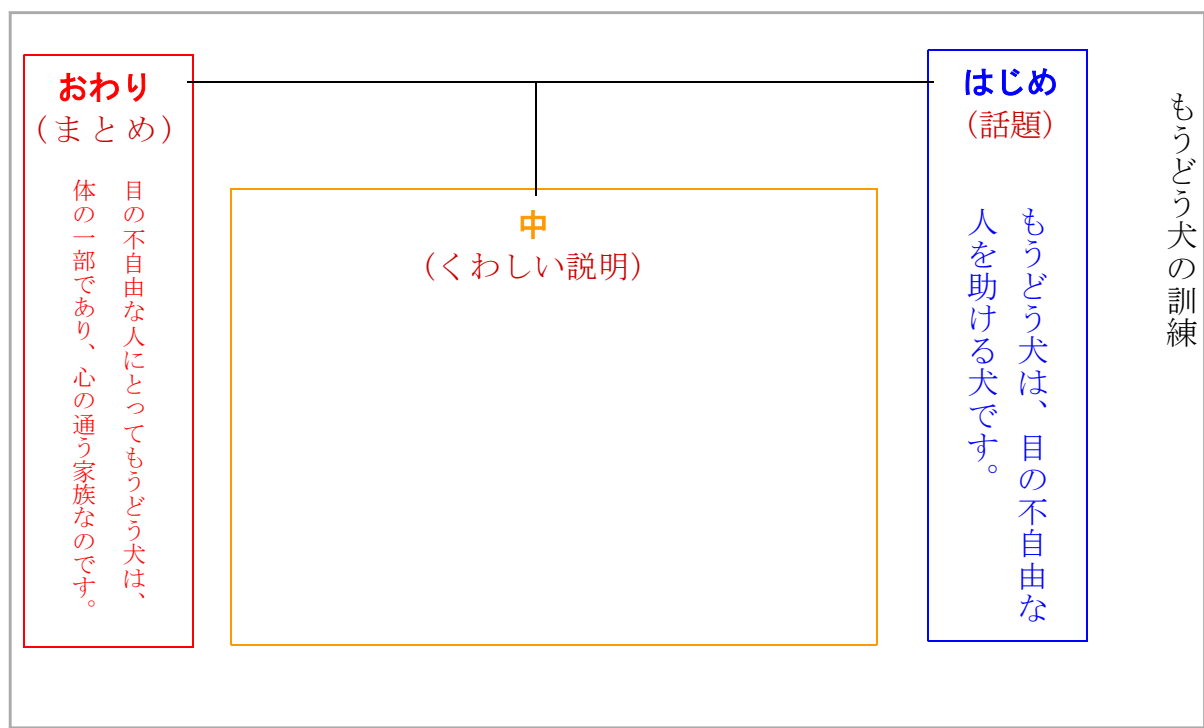
最後に、「要約」と「要約のわざ」について復唱し、本時の学習が構成図の「はじめ」と「おわり」に当たることを話し、次時から「中」の読みに入ることを告げて終わった。

(2) 第3時(10月23日)の授業について

本時では盲導犬の訓練内容を読み取り、次時では読み取りをもとに訓練内容を要約する。授業は2日にわたるものの、連続した展開になっている。

授業開始時点で、教室後ろの模造紙は次ページのようにになっていた。それを見ながら、今日は「中」の部分、すなわち盲導犬になるための訓練について読むことを確認した。

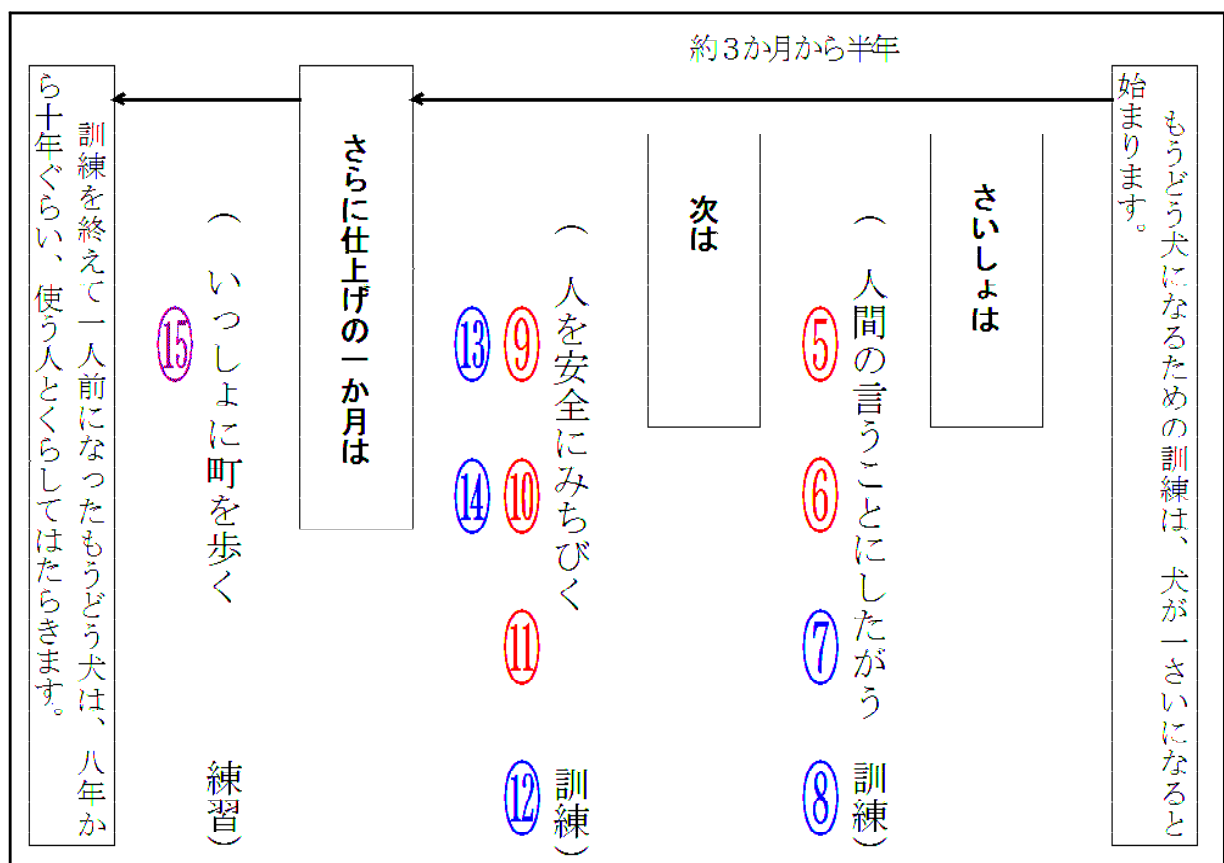
ペアで段落交代の音読をした後、次のように指示した。「順序やいつ頃という時期を表す言葉を見つけて、赤鉛筆で囲みなさい。」この時点では、「正解」の数は言わなかったし、ワークシートも渡さなかった。課題のレベルを上げるためだ。



つづいて、「その時にどんな訓練をするのか分かる部分に、赤鉛筆でサイドラインを引きなさい」と指示した。いずれも、意見を出し合いながらグループで取り組ませた。

スッキリとモヤモヤが混在している頃合いを見て、ワークシート(指導案参照。ただし、太ゴシック部分は空欄になっている)を配った。このタイミングの機微がこの時間のすべてであったと、振り返って思う。「ああ、やっぱり」「そうやったんや」という確認と納得のつぶやきの中で、ワークシートは仕上げられていった。

2つ目の課題は、2つのステップに分けた。まず、それぞれの訓練について書かれている段落番号を、○を付けない数字でワークシートの余白に書かせた。そして、犬の特長(前時の「犬はどんな動物か」の答えがそれで、授業後に「かしこい」「活発」「人なつこい」とまとめて掲示しておいた)を「生かしている」段落番号を赤で、「抑えている」段落番号を青で囲ませた。この部分は、各訓練が犬の特長を生かしたり抑えたりしながら進められていることを視覚的に捉えさせるための展開だ。子どもたちは、⑩⑬の扱いに迷い、⑮は「生かす」に分類していた。赤と青をミックスした「紫」も1つあると助言したが、これはあまり届かなかった。授業終了が迫っており、結論を出さずに置いておいてもよかったが、強引に押しつけた上で「生かしたり抑えたり」というまとめをした。強引は百も承知で、後の展開でフォローするつもりでいた。



さて、「ジャンプの課題」にたどり着いた時点でチャイム1分前。「犬の特長を抑えた訓練をするのはなぜか」という問いは、呆気なく解を得てチャイムに間に合ってしまった。授業そのものはそれでよかったのだが、「ジャンプの課題」に位置づけたことは完全な読み誤りだった。

(3)第4時(10月24日)の授業について

前時と連続した授業の後半部分が本時で、前時のワークシートや教科書の傍線を手がかりに、盲導犬になるためにどんな訓練をするのかを要約する。

ペアでの役割音読は、所要時間の考えて、「人間の言うことに従う訓練」部分と「人を安全に導く訓練」部分に分かれての1回にした。なお、どちらでもない段落は一緒に読むように指示した。

前時のキーワード、キーセンテンスを確認させ、「盲導犬になるためにはどんな訓練をするのか要約しましょう」と課題を課した。あわせて、「～する訓練をします。」という書き方になるように指示した。

グループの話し合いが始まって間もなく、子どもたちは、昨日のワークシートを使えば要約文ができることに気づいた。そこで、ワークシートになくても「ここは入れた方がいいと思ったら書き加えていいよ」と、ゆさぶりをかけてみた。案の定、子どもたちは迷い始めた。これも大事、あれも大事と言い出すと、結局全段落の要点を列挙することになる。

「そうかなあ」「それって、何の訓練？」などと時おり口をはさみながら、子どもたちの議論が収斂されていくのを待った。

犬が1さいになると訓練が始まります。

まず、人間の言うことにしたがう訓練をします。

次は、人を安全にみちびく訓練をします。**訓練を通して、もうどう犬にふさわしい心がまえも身につけていきます。**

さらに仕上げの1か月は、いっしょに町を歩く練習をします。

子どもたちは⑬段落の内容(太字部分)を加えていった。⑫段落の「使っている人にとってきけんな命令にはしたがわない」訓練については出てこなかったのも、私から示した。(斜体太字部分)

犬が1さいになると訓練が始まります。

まず、人間の言うことにしたがう訓練をします。

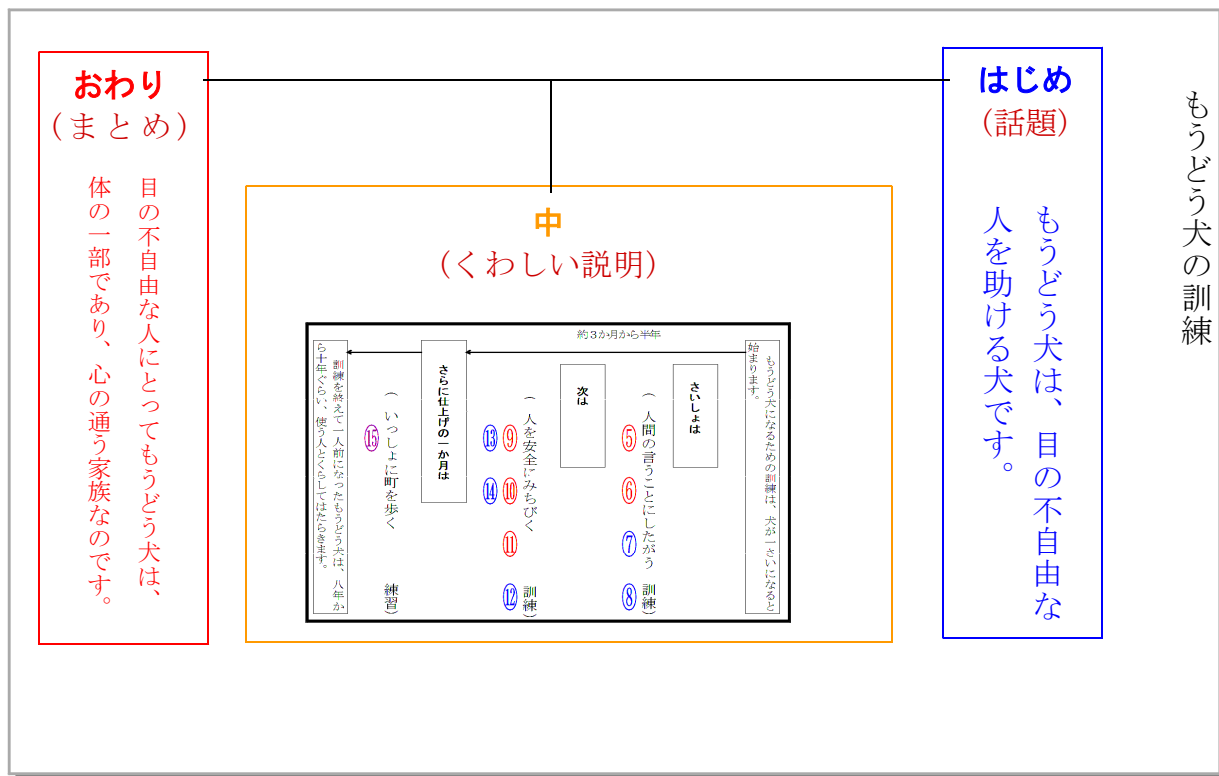
次は、人を安全にみちびく訓練をします。**その中で、使っている人にとってきけんな命令にはしたがわない訓練もします。**また、訓練を通して、もうどう犬にふさわしい心がまえも身につけていきます。

さらに仕上げの1か月は、いっしょに町を歩く練習をします。

いよいよ、ジャンプの課題である。「訓練を受けた盲導犬ができなくてはいけないことはどんなことですか」と尋ねた。そして、「盲導犬は、〇〇することができなくてはなりません。」という話形で答えるように求めた。

「盲導犬は、人間の言うことに従うことができなくてはなりません。」「盲導犬は、人を安全に導くことができなくてはなりません。」「盲導犬は、盲導犬にふさわしい心構えを身につけることができなくてはなりません。」…そこまでは、よかった。ある子が、「盲導犬は、危険な命令には従わないことができなくてはなりません。」と言って、言い回しの混乱が始まった。一方で命令に従うことを求め、もう一方で従わないことを求める。その命令が安全かどうかを自分で判断して、従うかどうかを決める――実に高度な要求をしていることを話して聞かせた。嘆息が漏れ、子どもたちは納得顔をしている。やや駆け足気味

ではあったが、学びの質を深める学習課題であった。



(4) 第5時(10月25日)の授業について

「盲導犬がしてはいけないこと」が書かれている段落を見つけるように告げて、段落交代読みで全文音読をした。⑭段落がそうであることを、子どもたちは難なく見つけた。

要約では、「他の犬がほえても、気にしないこともひつようです。」を「…気にしてはいけません。」と書き換えていた。「要約のわざ」を使って要約する活動の積み上げが、子どもたちの確かな力になっている。「おこったり、ほえたり、あばれたり」を「おこったり」に、「あまえたり、じゃれたり」を「あまえたり」に集約し、「おこったり、あまえたり、おいしそうなにおいのする方に行こうとしたりしてはいけません」とまとめたグループもあった。特にそうする必要はないと思うが、集約の根拠を聞いてそれも認めた。

つづいて、『してはいけないこと』をまとめて何という言葉で書き表していますか」と聞いた。ほどなく、「もうどう犬にふさわしい心がまえ」、絞り込んで「心がまえ」という言葉に行き着いた。そこで、⑬＝⑭であることを押さえ、第3時で⑬段落を強引に青(犬の特長を抑える訓練)に分類したフォローをした。その上で、「盲導犬は犬としての本来の要求の多くを抑えて無理をしてくれている」ことを話した。

最後は、「盲導犬が、もしも『してはいけないこと』をしたとしたらどうなるかを考えて、それを劇にきなさい。」と課題を出した。課題としてはおもしろかったのだが、いくつかの理由でうまくいかなかった。先に書いたことの繰り返しになるが、第1には、こうした活動にあまりに不慣れであったことが挙げられる。短時間で具体的な場面を設定してシナリオ化し、役割を決めて劇化するというのは、子どもたちの実力を超え過ぎた課題であった。第2には、やはり本時も時間不足に陥った。十分な活動時間を保障できなかったのは、授業の進め方の問題というよりも、課題設定そのものに問題があったと考えられる。

3 成果と展望

この単元の学習に限ったことではないが、この単元の学習でも確認できたことがあった。

1つは、UD+学びの共同体の営みは最下層の子どもたちの学びにとって有効だということだ。最下位層の子どもが学びの場に踏みとどまり、不十分ながらも話し合いに参加し、時には話し合いをリードする発言もあった。到底満足できるレベルではないが、個の学習ではそのレベルにさえ達し得なかったことは容易に想像できる。教師の指導力が上がれば、さらに高次の学びを保障できるに違いない。

2つ目には、UD+学びの共同体の営みは中間層の子どもたちの学びを押し上げるということだ。上位層の子どもをつぶやきが中間層の子どもたちの思考を支え、深化させる場面にしばしば出会った。「いい発言」が周りの評価を得、それがまた自信になっていく好循環ができてきている。

3つ目には、UD+学びの共同体の営みは上位層の子どもたちの学びの質を高めるということだ。上位層の子どもは、時に自分の考えを分かりやすく説明し、時にみんなの発言を整理・調整し、時になかまの学びを励まし…実に多様な役割を担っている。その過程で思考が論理的に整理され、確実性を増していつている。佐藤さんが「共有の課題」で最も得をするのは上位層の子どもだと指摘されているが、まさにその通りだと実感する。

つまり、どの子どもにとっても、UD+学びの共同体の学びは有用だと言える。その有用性を確認できたというのが現時点での成果で、あとは精度を高めていけばよい。

「精度」について言えば、現状では算数の授業の方がうまく展開できている。これは、課題設定の適・不適に依ると考えられる。したがって、国語における課題設定を工夫し、それをきちんとUD化することができたら、展望は開けると確信している。